UP（東京大学出版会）, No 476 (2012 年 6 月)、p.22。

矢内原と今 — 理科 vs 文科

昨年 (2011)12 月、私の部屋に須藤 靖さん（理学部教授、宇宙論をやられている）が来られ、「青木先生のことが出ていたので」、と一冊の本をわざわざ持ってきて下さった。須藤さんとは東京大学出版会から “UT Physics” という物理学のシリーズ（専門書とポピュラーサイエンスの中間を目論んだ）を創刊エディターとして編集しているが、彼は出版会の評議員もされていて、その関係で、最近（2011 年 11 月）東大出版会の 60 周年記念で刊行された「矢内原忠雄」(鴨下重彦、木畑洋一 、池田信雄、川中子義勝編集) という本を持っておられた。その編者が、矢内原門下で、小児科医で、東大名誉教授の鴨下さんであるが、私が「東大教師が新入生に勧める本」という UP 誌の企画に寄稿し (同名の文春新書に 2009 年に収録)、矢内原全集のことを書いていることに鴨下さんが気付かれて、これに感激して、本の中で述べておられる。

さて、鴨下さんの文章を拝見すると、私が矢内原全集を勧めた「理由も正鵠を射ている。駒場の新入生が一人でも二人でも挑戦してほしいと願う。」と言われており、我が意を得たりと思うが、一方、その後に、「驚きであったのは、それ（勧めたの）が文系ではなく理系の教員であったことである」といわれている。私は、超伝導、非平衡物理などを研究している物性物理学を専門とする者であるので、そう感じられたのだろうと思うが、私はかねてから、人間が、大事なことを思うときに、文系、理系は関係ない、とおもっているので、この小文で、なぜそう考えるかを思いつくままに触れてみたいと思う。

上記の鴨下さんは、東大教養学部創立 60 周年記念特別展「矢内原忠雄と教養学部」が 2009 年に行われたが、その際に「矢内原忠雄とキリスト教」というシンポジウムが行われ、鴨下さんも講演された。実は、私の妻がこれを聴きにゆき、鴨下重彦（編）「現代に求められる教養を問う」（to be 出版、2005 年）という本も求めてきたので、私も拝読していた。このように話が合いそうなので、お知り合いになりたいと思い、東大出版会に連絡すると、「実は先月 (2011 年 11 月、つまり、「矢内原忠雄」出版の月）亡くなられたんですよ」とのこと、残念至極である。UP の 12 月号の 69 ページにも追悼文が掲載されている。それによると、鴨下先生は、東大医学部長を歴任され、また、小児医学の振興や国際化にも尽力された方とのこと。要するに、鴨下さんご自身バリバリの理科系である。

さて、矢内原はもちろん文科系の学者だが、実は彼の考え方には理科系を思わせるものがある、ということから始めよう。たとえば、「矢内原忠雄全集」（図１）の第 17 巻（岩波、1964 年）を紐解いてみよう。矢内原は、「嘉信」と題した「恩師親戚朋友知人の方々」

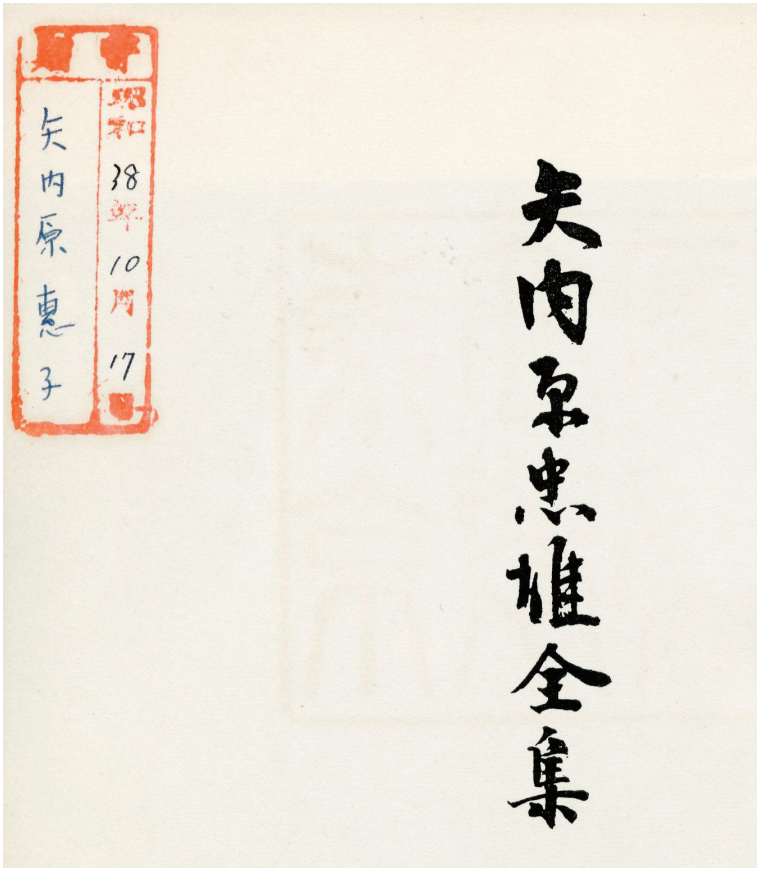


図 1: 「矢内原全集」の扉ページ。ここでは東大総合図書館蔵の、矢内原恵子氏寄贈の印がある巻を表示。

のために送る通信雑誌を 1932 年から発行していた。全集のこの巻には、「嘉信」に寄せた言葉を収録してあり、「毎日交誼の準備其の他で忙しく暮らして居りますが、その上に精力絶倫と言ふ風な体力も気力もありません」という彼自身の前書きとは全く裏腹に、凛とした彼の考え方に生々しく触れることができるが、その 1961 年の 7 月号に、「信仰の追試」という短文がある。曰く、「科学者が一つの実験の結果を出したとき、それが真であるか否かを確かめるため、多くの科学者が実験をくり返す。これを『追試』という。信仰真理も一度の啓示だけでは確かめられず、われわれの生活の実験を通して『追試』され、その真であることが実験的に証明される」。何と科学的な考え方！もちろん、宗教をこのようにとらえることに意味があるかということについては議論があるだろうが、ここでいいたいのはそんな是非の議論ではなく、矢内原が、信仰をそのように（つまり、闇雲に行われるべきではないものとして）とらえていた、ということである。思い出すのは、私は若い頃パスカルを夢中で読んだものだが、パスカル（いうまでもなく科学者）も多くの葛藤に科学者として悩んだ。彼の有名な句に、「神が在るとすると不可解であり、神が無いとしても不可解である」（以下拙訳）。しかし、最初から信ずるべきか否かを決められないので、試した上で間違いと分かる危険も犯しながらも「呻き乍ら探し求める」ことしか

できない、というのが彼が「パンセ」で説く結論である。

科学は事実のみを追うのであるから、神とは最も無関係なところと普通思われているのも無理はないが、実は科学は人間の営みであるから、そんなに単純なものではなく、理科系であろうともこのようなことを含め深く考えることもある。そもそも、人間と無関係に科学が存在する、というのは様々な考え方の一つ（ギリシャ（ヘレニズム）での考え）に過ぎない。私の周りにも、例えば、若い助手時代の頃の同僚で、同じ物性物理学の学徒である北原氏（その後国際基督教大学、現在東京理科大学で、日本物理学会長、日本学術会議会員を歴任）がおられるが、今年の年賀状で、また聖書の勉強を新たにしようかと思うと言われている。理論物理をやっている私自身、若い頃からいろいろと考えたり、呻き乍ら探し求めた口である。東大の物理学科の学生が毎年年末にやる「ニュートン祭」というのがあるが、よくそこで教員へのアンケートとして、「先生が物理をやるきっかけはなんだったのでしょうか」というのがあり、私は、特に何かきっかけがあったというよりは、基本から論理的に考えて理解することができ（ここまでは数学も同じ）、かつ自然を理解できる物理が好きだった、と答えている。そして、東大の助手時代に結婚直後に２年間イギリスのケンブリッジ大学の物理学科（キャヴェンディッシュ研究所）に visiting scholar として滞在したが、ノーベル賞 (物理学賞）を 30 人以上輩 出したこの研究所の入り口に、大きな板に「主の御業は大いなり、すべてその事跡を喜ぶ者は之を考え究む」（詩篇 111）と掲げられている（図２）のをみて感激した、とも。その後今にいたるまでイギリスにはよく行くが、キャヴェンディッシュ研に行く度にこの看板を眺めている。ヨーロッパは debate の国であるからして、例えば当時のキャヴェンディッシュ・プロフェッサー（マックスウェルを初代とする研究所長の職名）であったピパードさんと、「科学は国際的な学問であるが本来は西欧のもの」という彼の主張に反論したり、私の妻が音楽を教えているが西洋音楽だというと「何故日本音楽を教えないのか」など議論したことを覚えている。ヨーロッパでは、何百年という時間スケールでものごとを考えるので当然の議論である。欧米では科学と宗教の対話は普通のことであり、例えば、ケンブリッジにも、理論物理学者から僧侶になった John Polkinghorn という有名な方がいる。私がケンブリッジ滞在中から家族のように付き合っているケンブリッジ大地質博物元館長がおられるが、その奥様から Polkinghorn 氏を紹介されたこともある。彼の考えには批判も多く、私も必ずしも彼の意見に賛成という訳ではないが、ここで言いたかったのは、文系理系を問わず、人間の営みに思いを致すのは変わらないということ。それは、矢内原の後でも山上会館で前田護郎先生により続けられた聖書研究会に私が出ていた頃からおもっていたことである。

ちなみに、日本は圧倒的に文系社会である（但し、東大の物理は ISI の世界ランキングで常にハーバードやマックス・プランクに伍して世界１、２位を争っていることは、毎年



図 2: キャヴェンディッシュ研究所の入口の銘。

のように報道されているのでご存知かもしれない）が、外国では理系は文系と同程度に普通のものである。本屋に行けば理系の本が沢山山積みにしてあるし、タクシーにのって運転手と理系の話題に花咲くことも全く珍しくない。ケンブリッジではブラッグ（昔の有名なキャヴェンディッシュ・プロフェッサー）のことを運転手からきいたことがある。コッツウォルズという風光明媚な観光地のタクシーでは、私が物理をやっているというと、「ワシの甥にケンブリッジで物理をやったのがいるよ、その後ボストンに行ったけれど。お宅はどこから」「東京」「うちのカミさんは東大の先生の知り合いで、クリスマスカード交換してますよ」という具合。ニューヨークのイエローキャブでは、「半導体デバイスの経年劣化ていうのは、原子レベルでは何が起こっているんだい」としつこく聞かれたことがある。

さて、矢内原に話を戻すと、彼の考えや言葉は、いまでも現代的意味を失わないどころか、その意義は現在痛切なまでに高まっているのではないだろうか。いま時代は困難な曲がり角にさしかかっているのはいうまでもないが、そこで、たとえば新約聖書の最後をなす黙示録という書を紐解きたくなったとしよう。実は、私は黙示録というのはいくら読んでもさっぱり分からないので、この機会に矢内原全集の第 9 巻を開いてみよう。この巻は壮絶な巻。第二次世界大戦最中に執筆された、命がけの巻であり、著者自身、前書きでそのことを述懐している。命がけ、という意味は、戦争で文字通り命が危うかっただけでなく、矢内原はファシズムを批判したために、職を追われた時期でもある（丁度前田先生が卒業論文を書いていた頃にあたる）。黙示録は、キリスト教を弾圧する皇帝が「皇帝は神と思え」などと言っているのを批判する書である。その解説を、そのような戦時中に書いた著者の心中はいかばかりであったろうか、という意味でも命がけである。今の時代、時代の困難を理由に全体主義がはびころうとしている不気味な時代であり、「現代的な意義

は痛切」といったのはそういうことである。日本では、一人ひとりが自ら真剣に考えずに広き門を連れだって入るのが良し、人と異なるのは悪、という性癖が圧倒的に支配しているが、それでもなお時代にとらわれない人はいるのである。

とらわれないといえば、話は跳ぶが、私はクラシック音楽中毒であるが、なかでもモーツァルトがなければ夜も日も暮れない。彼は、実は理科系人間だったのではなかろうか。親父さんのレオポルトからして、旺盛な好奇心（ロンドンでは、当時の先端設備である避雷針を克明に観察している）、物事を根本から理解したいと思う姿勢など、理科系を感じさせる。そもそも音楽というのは、ギリシャ時代から、数学と共に理科系に分類されていた。モーツァルトは、当時宗教の一つの中心地（実際、ゲルマン文化圏におけるローマの役割を果たさせられていた）ザルツブルクの宮廷楽員であったから、宗教（カトリック）音楽は日常的に業務として作曲した。しかし、偏執的にとらわれたところが全くない、健康的な宗教音楽である。ハルノンクールのモーツァルト宗教曲全集（CD13 枚組!) で聴くと、実に心を打つ作品が点在する。最晩年のレクイエムが、彼岸を目の当たりにさせ、アヴェ・ヴェルム・コルプスが安らぎの極、というのは良く知られているが、これも晩年に突然発生したものではなく、若い頃からそうだった、ということがよく分かる。そして、モーツァルトは彼なりに、音楽（私の強引な分類でいえば理科）と宗教をどう融合あるいは高めあうものとするかを結構悩んでいたのでは、ということがひしひしと感じられる。ちなみに最近、東大理学部では各教員の研究紹介ビデオというものを作っているが、私のビデオの中では「モーツァルトと物理」という章がある。実は「モーツァルトと語る物理」という本を老後の楽しみに書こうかとすら目論んでいる。

なお、「勧める本」の私の本文は、私の HP http://www-cms.phys.s.u-tokyo.ac.jp/ に貼られている。